

# 小豆島でのGAPの取組

■ J A各生産部会、集落営農組織、個別生産者 ■

(小豆農業改良普及センター 小林 弥生 ○井口 工)

## ●対象の概要

管内はオリーブを始めイチゴ、キク、肥育牛、柑橘類など、多彩な農畜産物が生産されており、京阪神地区を中心に広く出荷されている。観光地として人気の高い小豆島は、全国的にも認知度が高いことから、農産物も多方面から注目されている。

生産集団は、J A香川県小豆地区営農センターのイチゴ部会や果樹部会など6部会、特別栽培米に取り組む任意集団1つが組織されている。個別では認定農業者が59経営体、農業法人はオリーブを中心に25法人となっている。



衛生に配慮したアスパラガス集出荷

## ●課題を取り上げた理由

ブランド価値の高い農産物の生産を持続的に維持するための大切な基盤は、食品としての安全性が確保されることで、農業生産現場での食品安全の取り組みは、近年ますます重要となってきた。しかし、現状は、生産者間で食品事故のリスクに対する意識格差が大きく、理解も十分進んでいないことから、現状を改善するための対策が求められている。

そこで、農業者自身が安全な農産物生産を確実に実現できる方法として「GAP（農業生産工程管理）」を着実に推進することとした。

また既に、オリーブとアスパラガスの生産に取り組む農業法人が高い関心を示していたことから、集中的な支援が必要となっていた。

## ●普及活動の経過

### 1 農業者へのGAP周知による意識向上

平成31年3月、普及センター、J A香川県小豆地区営農センターの共催で研修会を開催した。研修会では、「GAPの活用方法と農業に求められるリスク管理」と題して、外部の専門講師を招き、14名の参加があった。8月には、管内の認定農業者等担い手を集めた島内研修会において、GAP認証を取得した生産者による講演を行い、29名の参加があった。

### 2 生産部会などに対するGAP周知と推進

平成31年1月～4月、J A担当者と共にJ A小豆イチゴ部会員の出荷・調整場所を巡回し、衛生管理の状況や作業安全の観点から状況を調査した。8月には、エコファーマー認定を受けている小豆島町の東條地域営農集団の構成員26名を対象に研修会を開催した。9月には、小豆島町においてオリーブ生産者、関係団体を対象としてGAPの取り組みや活用方法についての研修会を実施した。

このほか、J GAP指導員資格を持っている普及指導員がJ A各生産部会で、栽培講習会の際にGAPの周知活動を実施した。



外部講師によるGAP研修

### 3 GAP認証の取得推進

認証を目指す農業法人に対し、有資格の普及指導員数名がチームを組み、県補助事業を活用するなどして、認証取得に向け集中的に

支援した。また、アスパラガスがJAを通じて出荷されていたことから、同集出荷施設を外部委託先としての認証に取り組んだ。



JGAP審査員による審査

## ●普及活動の成果

### 1 農業者へのGAP周知による意識向上

研修会では、生産者から、県で実施しているGAP制度の有無、GAPに取り組む上でのメリット、認証マークの表示での商品の差別化などの質問があり、管内生産者のGAP、リスク管理に対する知識は確実に向上しており、意識も徐々に変わりつつあることを実感した。

GAPの取り組みの基本は、各人が計画し、実施、記録することから、十分理解してもらうよう指導を継続し、当日の欠席者にも周知徹底を図った。さらに、個別指導も同時に実施した結果、個別認証取得を希望する生産者が現れた。

### 2 GAP認証の取得推進とリーダーの育成

7月、小豆島町の(株)高尾農園(オリーブ、アスパラガス)が、オリーブでは全国初、アスパラガスでは県内初となるJGAP認証を受け、オリーブオイルの輸出に向けた取組も描けてきた。2月には、土庄町豊島の多田農園(イチゴ)が、イチゴでは県内初のJGAP認証を受けた。自家で経営するフルーツパーラーには、多くの外国人客が訪れることから、自家農産物への信頼がより高まることが期待される。

また、3月には、土庄町で肉牛肥育に取り組むオリーブ牛の発案者石井正樹氏が「畜産チャレンジGAP」の審査を受け、近々認証される見込みである。

これら、個別指導を実施する中で、JGAP指導員資格を取得した生産者が2名おり、今後

の認証取得や、地域のリーダーとして、GAP推進に協力してくれることが期待される。

さらに、来年度はJGAPの上位互換認証であるASIGAP取得を目指す農業法人もあることから、今後も意識が高まり、国際水準のGAP認証取得を目指す生産者が増加することが見込まれる。



畜産チャレンジGAP審査状況

## ●今後の普及活動の課題

オリンピック・パラリンピックが開催されつつある中で、持続性の高い農業、農業生産工程に対するリスク管理などGAPによる管理はますます重要度を増していくと考える。

個別認証をここまで進めてきたが、今後は、JA部会組織全体など、団体でのGAP認証を模索する必要がある。団体認証では所管する事務局の責任、作業能力が重要となることから、構成員などについて検討する必要がある。

小豆普及センターでは本年度、3名がGAP指導員基礎研修を受講し、有資格者が7名(うち「家畜・畜産物」1名)となり、支援体制の一層の強化が図られたことから、引き続き重点課題と位置づけ支援を行っていく。